

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷五十第

行發日一月一十年一十正大

論叢

- 交通税の長短 法學博士 神戸 正雄
- 傳統派の社會連帶思想 文學博士 米田庄太郎
- 社會哲學に於ける主意的二元論的思想 法學士 恒藤 恭
- 經濟道と經濟術 法學士 作田 莊一

時論

- 我國の人口對食糧問題 法學博士 山本美越乃
- 食料品市場問題 法學博士 河田 嗣郎

資料

- 金輸出解禁問題 法學博士 戸田 海市

雜錄

- 戰爭と道德の原則 法學博士 財部 靜治
- 物價引下策と抽籤景品附賣買 法學博士 小川郷太郎
- 排マルクス説の新刊書一二について 法學博士 河上 肇
- 日銀兌換券發行高の季節的變動 法學士 汐見 三郎

我が國の人口對食糧問題

山本美越乃

人は結社の動物なりとは先哲アリストテレスの夙に道破せる所なるが、由來人は單獨孤立の生活を營むこと能はず、人類の棲息する所常に必ず集團結社の現象を伴ふを以て本體とする、而して一定の土地の面積上に人類の集團的生活を營める現象を稱して社會と謂ひ、此の社會を組織せる人の總和を人口と稱するのである、故に人口問題なるものは單純なる個人の問題に非ずして全く社會問題である、人類の集團的生活を營める所に社會存し、社會の存する所に人口又必ず存すとせば、人口を研究の主題とする所謂人口問題なるものは、其の沿源する所顯る古しと言はねばならぬ、併し往昔人口未だ稠密ならず從て到る處に廣大なる土地の殘存せる時代には、假令人口問題なるものありとするも、そは或は軍事上の目的即ち領土防衛上の必要より、或は財政上の目的即ち人頭税其の他に之に類する租税徴收上の必要より論議せられたるか、然らずんば單純なる種族繁殖の見地より此の問題を考察せるに過ぎずして、今日稱する人口問題なるものとは大に其

の意義を異にして居つたのである。

然るに近時の人口問題は主として經濟上及道義上の見地より之を考察せんとするものにして、彼のトーマス、ロバート、マルサスが第十八世紀の末葉『人口論』を公にしたるより始めて世の注意を惹くに至つたものである、固よりマルサス以前にも人口問題に就きて意見を發表したる人なきに非ざるも(例へばゴッドウインの如き或はコンドルシェーの如き)、其の議論は未だ廣く世の注意を惹く程に深刻に問題の急所に觸れて居らなかつた、然るにマルサスは其の著『人口論』に於て、人口は幾何級數的の速度を以て増加するも、之を支ふべき食糧は算術級數的の速度を以て増加するに過ぎぬ、故に現状の儘に放置せば食ふに糧なき人間を増加せしめ、其の結果疫病、饑饉、戰爭等の慘劇を演せしめ、或は盜賊、掠奪、殺人、墮胎等の罪惡を發生せしめ、斯くして人類は互に自滅の境涯に陥らざるを得ない、而して之を救ふの途は唯各人が克己自制に依りて人口の増加を制限するにあるのみとの、有名なる人口の前途に對する悲觀說を公にして大に世人の注意を喚起した、彼れの説は社會の各方面に非常なる反響を與へ、爾來經濟上及道義上の見地より人口問題を學問的に研究せんとする者を續出せしめ、甲論乙駁以て今日に及んで居る、故に近時の人口問題はマルサスを以て其の起點と稱するも敢て失當でない。

廣く人口問題と稱する時は人口に關する一切の問題を包括すべきが故に、其の意義甚だ漠然た

るが如き感あるも、現今人口問題が極めて重大なる問題として研究せられ論議せらるゝ中心は、要するに人口の増減が如何なる影響を家族、國家、世界等に及ぼすやと云ふ點にあり、而して人口の増減が如何なる影響を家族、國家、世界等に及ぼすやと云ふことに關しては、之を種々の方面より考察することを得るのである、例へば貧困問題、勞働問題、職業問題、土地問題、食糧問題、國民保健問題、國防問題、移植民問題等の各方面より考察して、其の利害得失を攻究することを得るのである、併し本論の目的は主として食糧問題より觀たる我が國の人口問題を研究せんとするに在るを以て、必要な限りは他方面の考察には論及しない。

凡そ一國の人口問題を考ふるに當りては、先づ其の基礎となるべき事實即ち其の國の人口の實數を知ることが最も肝要なるも、這は人口調査の方法に依りて之を知るの他途がない、然るに人口の調査は社會の進歩換言せば調査機關及其の準備の完整と共に次第に確實性を帶ぶるに至るも、社會の未だ進歩せざる時代には調査方法の如きも頗る不完全なるのみならず、諸種の事情の爲めに實際調査を妨げられ、若くは故意に事實を隱蔽せんとするが如き傾きあるより、到底調査の完全を期待することを得ない、我が國の人口調査も亦此の例に洩れずして維新前に於ける調査と維新後に於ける調査との間には著き差異がある、故に我が國の人口を便宜上維新の前後に分ちて其の大勢を觀察せんに、

(一) 維新前の我が國の人口に就きては今日信賴するに足るべき文献に乏く、從て僅に残存せる斷片的材料より之を推測し得るに過ぎぬ、往昔國土の面積に比して人口稀薄なりし時代には、各人は生活上に何等の不安を感ずることなかりしを以て、其の行動は自ら自然主義的若くは本能充足主義的なりしことは之を想像するに難くない、從て斯かる時代には人口は生活問題以外の或特別の理由(例へば私通姦通等に因る墮胎の如き)を以て制限せられたる他は、特に制限を受くことなくして自由に増加したるものゝ如くである、併し其の増加の實數に至りては今日より之を知る由がない、此の如くして我が國に於ても八代將軍徳川吉宗の時に至る迄は、人口に關して信據するに足るべき記録が殆どないと稱しても敢て過言でない、然るに徳川吉宗の時に至りて不完全ながら當時の帳簿に基きて人口の調査を爲せしが、其の概數に據れば二千六百餘萬人と稱せられた、有名なる享保年間の人口調査として世に傳へらるゝ所のものは即ち之である、此の他維新前の我が國の人口のことに關しては勝安房氏も次の如きことを言ふて居る、即ち、……人口の如きも戶籍の制あり調庸の法あり之を精密に調査せし事疑ふべからずといへども文献の徵するに足るものなし、近古戰爭の世となりしより邦内紛亂を極め終に一國の人員も知るべからざるに至る、而して軍人は其數を秘して隣國にも知らしめず是れ軍略の要に出でて各其衆多を稱して敵國を恐怖せしめ其猛勢を張るによる、此弊や泰平の時に至りても改めず

軍役の制ありといへども其藩士の人員を秘せざるものなし、然りといへども其國田圃の廣狹城下の形勢を觀察すれば自ら其大數は知らるべきものなり、余案するに近古以來全國軍人所謂武士の數大凡三十數萬に過ぎざるべし、而して國民の大數に及びては享保の調査最も適實にして後證となすに足れり……(勝伯編、吹塵錄上、第五冊人口及國高之部、人種人口小記)と、要するに維新前の人口の狀態に關しては今日之を精密に知ることを得ない。

(二) 維新後に於ける我が國の人口調査の最初ものは明治四年太政官布告第七十號戶籍法に因り翌五年に全國の人口を調査して戶籍を整頓したるを以て始めとし、爾來明治三十年に至る迄は毎年各地方より報告を徴して調査を繼續せしが、同三十一年に改正戶法の實施せらるゝや調査手續を改めて將來は五年毎に申告せしむることとした、然るに同三十五年に至り國勢調査に關する法律公布せられ之に據れば十年毎に調査を行ふこととし、其の第一回の調査は大正九年十月一日午前零時の現在を以て行はれたのである、而して該調査に據れば我が國の内地に現在せる人口の總數は五千五百九十六萬一千四百四十人であつて、其の密度は一方哩に付三百七十六人餘の割合となつて居る、今之を外國の例に徴するに北米合衆國の人口は一億五百七十一萬六千二百人(一九二〇年)、獨逸は五千九百八十五萬七千二百八十三人(一九一九年)、英吉利は四千七百三十萬七千六百一人(一九二二年)、佛蘭西は三千九百二十萬九千七百六十六人(一九二一年)、

(1) 外國の事例に關する計數はThe Statesman's Year-Book, 1922 に據る。

伊太利は四千七萬百六十一人(一九二二年)、なるを以て、我が國は現今の文明國中に於ては米、獨に次で人口の多い國である、又其の密度よりするも白耳義の一方哩に付六百七十人(一九二〇年)、和蘭の五百四十四人(一九二〇年)に次で我が國は人口の密度の高い國である。

我が國の人口の趨勢は維新以降年々増加の一方のみにして、明治五年の人口調査の際には三千三百萬人臺なりしものが同二十二年には四千萬人臺に達し、更に同四十二年には五千萬人臺に迄増加した、而して大正九年の第一回國勢調査の結果我が國の人口の現在數は前述の如く五千五百九十餘萬人なること明かとなりしを以て、是れに依りて觀れば明治五年乃至大正九年の四十九箇年間に於ける人口の増加は二千二百萬人に上り、假りに明治五年の人口を一〇〇とせば大正九年の人口は一六九となり、即ち四十九箇年間に六割九分の増加を示して居る。

由來人口の増加は一方より之を觀察する時は國家又は社會の隆昌の反映として現はるゝものなるが故に、斯かる點よりせば寧ろ慶すべきであるが、唯問題は單に數に於て増加するのみならず其の質に於ても亦優良となるの傾きありや如何と云ふことである、蓋し眞實なる人口の増加は毫も憂ふるの必要なく 國家社會の爲めに慶賀すべき事たるを以てである、嘗てウキリアム、ベツチーは人口は十年を以て倍加すべしと言ひ、又マルサスは何等の制限を受くることなき時は人口は二十五年を以て倍加すべしと言へるは、悲觀的人口論者の常に引用する所なるも、此の如き

急速度を以てする人口の増加は常例としては之を發見することを得ない、併し假りに最近即ち大正三年乃至同七年の五箇年間に於ける人口二〇〇〇人に付一箇年の平均増加率一二・〇九人の割合を以て算出せば、我が國の人口は約五十八箇年を以て倍加することゝなる、故に此の計算に據れば大正七十年頃には我が人口は一億を突破する譯となるのである、而して若し人口が此の如き勢を以て増加すと假定せば、我が國土内には是等の人口を收容し得るや否やと云ふに、之を他國の例に徴するに白耳義は人口の最も稠密なる國にして一方哩に六百七十人を收容せるが故に、此の割合を以てせば我が國土内には九千九百六十餘萬人を容るゝことを得べく、従て現在の人口の増加率を以てするも今後尙ほ五十餘年間は其の收容力ありと言ひ得る、又和蘭の人口の密度即ち一方哩に五百四十四人の割合を以てせば、我が國土内には八千〇九十餘萬人を容れ得べきが故に、今後尙ほ四十餘年間は人口の收容力ありと稱することが出来る、併し今日の勢を以て進まば早晚收容力の充實する時期の來ると云ふことだけは覺悟せなければならぬことは勿論である。

乍然又他方より之を觀察する時は、人口の多少は國方の消長と密接なる關係を有し、平時に於ては固より戰時に於ても是等兩者の關係の密なるものあることは、現に佛獨兩國の實況に徴するも明かなる所にして、他の事情にして大差なくんば人口の多き國は然らざる國よりも、少くとも次に述ぶるが如き利益を有することは事實である。即ち一人人口の増加は國民の活動力を豊富なら

しめ對內的にも對外的にも發展を可能ならしむる利益がある、(二)産業上の活動に缺く可からざる勞力の供給を潤澤ならしめ産業立國の基礎を鞏固ならしむる利益がある、(三)人口の増加は國防力を充實せしむる利益がある、(四)人口の増加は國民に海外發展の動機を與へ移植民的の活動を刺戟する利益がある、(五)人口の増加は各人の間に競争心を旺ならしめ匪勉努力の念を強からしむる利益がある。

併し既に述べたるが如く人口の増加は數の問題と共に常に質の問題を考慮して、其の果して喜ぶべき現象なるや否やを決せなければならぬ、而して質の問題に就きて茲に特に注意すべきは、近時學者の口にする所謂優生學上の研究に依り、優良なる分子を積極的に保護し増殖せしめんとすることも固より必要であるが、吾人は我が國刻下の急務としては寧ろ現代文明の齎す各種の惡疾の傳播を防ぎ、之が豫防に全力を盡くすことに依りて消極的に國民の體質の廢頽を防ぎ、斯くして健全なる分子を保存し増加せしむることに努力するを肝要と信ずる、此の如くして數の増加と共に質の優良を維持することを得ば人口の増加は敢て之を憂ふるに足らぬのである。

唯前述の如き場合に次ぎに問題となるは、是等の増加したる人口に對して適當の職業を與へ、又必要なる生活の資料を與ふることを得るや否やと言ふことである、若し増加したる人口に對して適當の職業と必要なる生活の資料を與ふることを得ば、多々益々國力の充實と國富の増進を期

待し得る譯である、於乎問題は更に進んで増加したる人口に對して與ふべき職業の有無と、之を支ふべき生活資料如何と云ふことに及ばねばならぬ、然るに増加したる人口に對して與ふべき職業の有無に關する研究は、本論の論題外に互ると又餘りに問題の範圍を大ならしむるの虞れあるより之が詳論は他日に譲り、茲には唯一言年々増加すべき人口に對して適當の職業を與へんと欲せば、本來自給的の性質を有せる産業たる農業のみに如何に勵精するも到底其の目的を達することを得ない、之と共に國際的産業即ち商工業的の方面に一新生面を拓くに非ずんば不可なることを附言するに止め、之より本論の主眼たる増加したる人口を支ふべき生活の資料殊に其の食糧問題に付きて研究を進めることとする。

人口の増加と共に先づ第一に吾人の念頭に浮び來る問題は其の食糧に關する問題なるも、此所に吾人の研究せんとする所のものは、食糧の中に就きても殊に主要なる地位を占むる米に關しての問題である。

明治二十一年より昨大正十年に至る迄の三十四箇年間に於ける米の需要供給の關係を觀るに、内地の生産額のみを以て需要を充たし得たるは、僅に明治三十二年以前に於ける數年に過ぎずして、¹⁾ 其の他の年に於ては唯多少の差こそあれ常に輸移入米に依りて供給の不足を緩和し來れるを以て、我が國に於ける米の供給不足の問題は近年に至りて始めて起れる問題に非ずして、實は既

1) 明治二十一、二十二、二十四、二十五、二十六、二十八、二十九及三十二年に過ぎず。大正八年二月農商務省刊『米麥統計要覽』參照。

に二十有餘年來の大問題である、固より米の需要額の増加と共に其の生産額も亦年々増加しつゝあることは事實なるも、其の増加の割合は到底需要の増加の割合に及ばない、大體我が國民の平均一人當の米の需要額は幾許なりやと云ふに、這は年に依りて多少の差異あるも明治二十一年より同三十年頃迄は平均一人當九斗四升餘なりしに、同三十一年より三十五年迄の間は平均九斗六升餘に増加し、更に明治三十六年以後は一石一升以上に上り、最近即ち大正六年より昨十年迄の五箇年間の實況に依れば、一箇年平均六千三百二十六萬石餘の米を消費しつゝあるが故に、之を人口の總數五千五百九十六萬人に割當つる時は、平均一人當の米の消費額は一石一斗三升餘に相當することゝなるのである。

然るに内地の米の生産額は大正九年に六千八十餘萬石、同十年に六千三百二十餘萬石と云ふ稀なる收穫を見たるも、其の他の年には少き時は五千萬石内外、多き時と雖も五千七八百萬石を出でざりしが故に、内地の生産額のみにては到底需要を充たすこと能はず、從て其の不足額は或は外米の輸入に依り或は朝鮮米及臺灣米の移入に依りて補充し來つたのである、斯くして最近十箇年間の平均に據れば輸入米は一箇年約百九十八萬石移入米は約二百三十八萬石合せて四百三十六萬石餘に上り、此の中より内地米の國外に輸出せらるゝ額一箇年約四十萬石を差引く時は、結局輸入米の超過額は一箇年平均三百九十六萬石餘に達するのである、獨り人口の増加のみなら

す國民の生活程度の進歩するに伴ひ、主要食糧品即ち日常の糧として米を消費する以外に、種々の加工原料品（例へば酒類、酢、麴、菓子等の原料となすが如き）として之を消費することも亦少からざるが故に、米の需要額の年々増加の傾向あることは止むを得ざる所である。

元來人口増加の率なるものは決して不變のものに非ずして時と共に變化するが故に、過去に於て一定の比例を以て増加し來れるが故に將來も亦必ず同一比例を以て増加するものゝ如くに推斷することの正しからざるは勿論なるも、假りに過去に於けるが如きか若くは略之に近き比例を以て今後も人口増加するものとせば、而して又一面に於ては人口の増加は國力の充實及國富の増進に重大なる關係を有すること前述の如しとせば、現在に於て既に食糧の不足を告ぐる状態に在る我が國は、何よりも先づ食糧政策の確立を計ることを以て最も急務とすべきは勿論のことである、然るに一部の論者間には『食糧政策に如何に努力するも到底人口の増加に追隨することは不可能である、故に結局人口の増加を制限して活路を開く他途なし』と論じて問題の解決を直ちに人口制限論に求めんとするが如き者があるが、人口の増減は國運の消長に至大の關係を有する重大問題たる以上は、食糧政策上最早他に施すべき策なしとせば兎に角、尙ほ施すべき幾多の方策の遺されつつある今日に於て、先づ此の方面に忠實なる研究と考慮とを加ふることを爲さずして直ちに翻譯的の人口制限論を借り來りて此の重大問題を輕々に論議し去らんとするが如きは、

決して眞摯なる態度と稱することを得ない、故に吾人は人口の制限に依る所謂消極的の人口對食糧の調節策を考ふる前に、先づ食糧の増加に依る積極的の人口對食糧の調節策を考ふることを以て急務と信じ、且之を極力提倡せんと欲する者である。

然らば其の所謂食糧の増加に依る積極的の人口對食糧の調節策とは如何なるものなりやと云ふに、之にも亦二つの意義がある、即ち其の一は現在の生産額中より日常の糧食用に更に多くの量を充てしめんが爲めに、糧食以外の目的例へば酒類、酢、麴、菓子等に少からざる米麥を消費しつつある現狀を改めて、是等の目的の爲めにする消費量を可及的節減せしむること、米麥以外の食糧品にして其の代用となる物は之が使用を奨励すること、米麥等の精白法を改めて其の實質減を豫防し現實量の増加を計ること等であつて、其の二は耕地の擴張及整理、農作方法の改良、植民地農業の奨励等に依りて積極的に食糧の増加を計ることは是れである、而して第一の方法に就きては既に屢々論議せられたる所なるも、第二の方法に關しては未だ世人の注意を喚起せしむるに足る程の有力なる説を多く耳にしない、故に吾人は此の第二の方法に依る食糧問題解決の資料となるべき事項を茲に紹介せんと思ふ。

上述の第二の方法に就きては曩に農商務省の農務局に於て可なり綿密なる調査を遂げて其の見込を發表したことがある、¹⁾吾人は敢て此の調査が完全無缺のものであるとは信せぬ、併し比較的

1) 大正七年農商務省農務局刊『本邦食料(米、麥)需給に關する將來の見込』

のみにて現在耕地擴張の見込ある土地は約百三十萬町歩あるを以て、第一期の事業として十五箇年計畫を以て先づ二十五萬町歩を急に開發することとし、其の後は必要に應じて毎年二萬五千町歩乃至三萬町歩を開發し行くこととする、尤も右の十五箇年計畫の他に從來の施設に依りても毎年一萬町歩位は開發さるゝが故に、之を合する時は十五箇年間に約四十萬町歩の土地を開發することを得るのである、此の他に北海道に於ても耕地擴張の見込ある土地は七十餘萬町歩程あるを以て、毎年約二萬六千町歩を開發する時は、内地北海道を合して十箇年後には約二百三十四萬石、二十箇年後には約六百二十三萬石、三十箇年後には約一千〇五十四萬石の米の増收を見ることが出来るのである。

(第二)は内地に於ける耕地の改良に依りて之に應せんとするものであつて、内地の現在の耕地改良の見込地は約百萬町歩なるを以て、毎年約三萬町歩の割合を以て改良整理せば、十箇年後には約百二十三萬石、二十箇年後には約二百四十六萬石、三十箇年後には約三百三十八萬石の米の増收を見ることが出来るのである。

(第三)は内地に於ける農作方法の改良に依りて米の増收を計らんとするものであつて、農作方法の改良に多少注意せば、水稻は一反歩に付毎年平均一升宛陸稻は平均六七合宛を増加せしむることは敢て困難なることでない、故に此の方法に依りても十箇年後には約三百八十五萬石、二十

箇年後には約七百四十萬石、三十箇年後には約一千一百萬石の米の増收を見ることが出来るのである。

(第四)は朝鮮及臺灣に於ける農業の獎勵及改良に依りて移入米を増加せしむることであつて、其の獎勵方法の如何によりては十箇年後に約二百六十萬石、二十箇年後に約五百十萬石、三十箇年後に約七百七十萬石の米を移入せしむることは決して難事でない。

此の如くして以上の四方法を併せ行ふとせば、十箇年後には約一千萬石、二十箇年後には約二千一百萬石、三十箇年後には約三千三百萬石の米の供給の増加を見ることとなり、即ち十箇年後には其の供給額は優に増加したる人口の需要額を充たして尙ほ餘りある状態に達するに至るのである。

以上は農商務省の食料自給策に關する調査を基礎として、我が國に於ける人口對食糧問題の調節は、若し政府も國民も共に之が解決を最先の急務として、其の斷行に着手するの勇氣と決心にあらば毫も困難なる問題に非ざることを指示したに過ぎぬのであるが、更に該調査を仔細に檢する時は、今日の實況よりせば此の調査は凡てに於て寧ろ大に内輪に見積られ居ることを發見することが出来る、即ち其の内の或項目に就きては多く、又或項目に就きては少く見積られつゝある結果、人口對食糧問題の解決には更に有利なる結論を生ぜしむることとなるのである。

例へば該調査に據れば大正七年の人口の現在數を五千六百八十一萬一千八百人と見積り之を基準として諸種の算定を爲せるも、二年後の大正九年十月一日の國勢調査の結果に據れば、同日の現在數に於て既に我が人口は五千五百九十六萬一千四百四十人なることを確かめ得たるが如き、又人口の増加率に就きても該調査は毎年一〇〇〇人に付一四、二七人として算定せるも、這是人口増加率の最も大なりし明治四十四年乃至大正四年(此の五箇年間は多き年は人口一〇〇〇〇人に付一五、九九人、少き年と雖も一四、六一人の割合を以て増加したり)を其の内に包含せしめて平均率を算出したるを以て斯く高率となれるも、大正五年以後は人口一〇〇〇〇人に付一二、七〇人以下に下りつゝあるが故に、此の趨勢にして持續せんか、人口増加の實數も亦該調査よりは遙に少かるべく、更に耕地の擴張及改良の見込地の面積に至りては、何れも其の見積りの寧ろ小に過ぐるなきやを疑はしむべき幾多の理由あり、又假令其の見積りを正當なりとするも、熟田の米の收穫量を平均一反歩に付一石七斗四升七合とし、農事の改良に依りて三十箇年間に三斗(毎年一升の割合)を増加して二石〇四升七合に達するものとして計算せらるゝも、晩近農作方法の改良に依りて一反歩に付三石乃至四石の收穫を見ること稀ならざる現状の下に於ては、平均一反歩の收穫量を三十箇年後に於て二石内外と算定することは當を得ざるべく、恐くば熟田の米の收穫量の基礎を一反歩に付平均二石五斗内外と定むることを得るに至るは、遠き將來のことでないからう

と思はるゝ。

以上の他該調査に就きて特に吾人をして異様の感を抱かしむるものは、政府當局の植民地の農業状態に關する知識の案外に乏しいことが、該調査に依りて全く暴露され居ると云ふことである、臺灣の状態は姑く之を措き朝鮮のみに就きて考ふるも、朝鮮の氣候は夏季稻作の時期に於て氣温高く、又内地の如き暴風雨の襲來少きを以て、米作地としては頗る適性を具へ、且つ其の地味地質の如きも敢て内地に劣らない、唯從來農業方法の不完全なりしが爲めに著く地力を消耗しつゝあるを以て、先づ土地に改良工事を施して灌溉排水の便を計ると共に、種子肥料等の選擇に内地に於けると同一程度の注意を加ふるあらんか、將來は驚くべき優秀なる米産地となるであらう、殊に朝鮮米の特長は其の品質の甚だ佳良なることに於て、上米の部に屬するものは現に内地に於て肥後米又は防長米と同格の取扱ひを受けて居る、然るに朝鮮の田地の面積約百五十萬町歩中灌溉の設備を有するものは僅に其の五分の一位に過ぎずして、他は全く降雨にのみ依頼する所謂天水田である、從て現在に於ては其の生産力は甚だ小にして平均一反歩の收穫は一石内外なるも、這是全く灌溉設備の不完全なるに原因するものなるが故に、其の設備を完成せば産額の増加は期して待つべきである、其の他朝鮮には未開地の開墾、干潟地の干拓、畑地の地目變換等に依りて新に水田を設け得る場所が決して少くない、今日迄の調査に據れば其の面積は約百四十萬町

歩と稱せらるゝも、内四十萬町歩は最も容易に新田となり得る見込がある、故に假りに二十箇年計畫を以て上述の灌漑の設備、未開地の開墾、干拓及地目の變換等を行ひ、之と同時に施肥配種其の他諸般の農作方法に不斷の改良を加へば、三十箇年後には優に一千八百萬石内外の産米を増加し得べく、内八百萬石を朝鮮内地の消費に充つるも、残り約一千萬石は之を移出することを得るのである、加之、水田の改良、未開地の開墾、干拓及地目の變換等に要する費用の如きも朝鮮に於ては比較的少額を以て足り、例へば將來一石を得る爲めに要する是等の事業費は平均二十圓乃至四十圓を以て足るも、日本内地に於ては少くとも七十圓以上を要すると云ふことである、¹⁾故に朝鮮に於ける産米増殖の計畫を樹立することは、是れ實に我が國の食糧問題を解決する鍵鑰にして、又之に依りて朝鮮の經濟財政上にも少からざる好影響を與ふるものなることを惟ふ時は、政府當局は萬難を排して着々此の方針に向て其の歩を進めるべきであらうと思ふ、類似の事情は、畜に朝鮮のみならず臺灣に於ても亦之を認め得らるゝのである。

要之、以上述べたるが如き諸種の事情を綜合して考ふる時は、内地に於ても植民地に於ても農業上に尙ほ改良擴張の餘地の存する幾多の施設の殘存せる今日に於て、²⁾輕卒にも人口對食糧問題の前途に關して根據なき極端なる悲觀説を唱へ、甚しきに至りては人口制限を以て此の問題に對する唯一の解決方法の如くに速斷し、茲に避難の安居を求めんとするが如き説を立つる者あるは、世を誤ること大なりと評せざるを得ない。

1) 三井朝鮮總督府技師稿『朝鮮産米増殖に關する意見』(大正十年拓殖局刊)參照。

2) 大正七年農商務省農務局刊『主要食糧農産物改良増殖獎勵に關する參考資料』參照。